

すべては前世紀のナポリからはじまった古書探し

南山大学法学部教授 田中 実

私どもの世代は、漫画やSF小説などを通じて子供時代に思い描いていたある種の進歩が全く実現されていない21世紀を生きている。と同時に、大学教員になった頃でさえ予想もできなかった進歩を遂げた21世紀を経験している。インクナーブラ時代に続く1500年以降に欧州大陸で爆発的に出版されたローマ法・普通法文献を実物の手軽さはないもののnetでiPadで四六時中利用できる環境が実現し、世界中の古書店を会員に運営される幾つものサイトでお目当ての古書が見つかることもあり、価格、店の信頼度、運送費、要する日数を考えて注文をクリックすると、21世紀には過去のものとなっているはずだったのに悪化の一途を辿る大学の雑務に追われている間に、イタリアやフランスからでも驚くべき速さで古書が届いている。日本にカタログが届いた頃にはほめばしいものは売れていた時代がウソのよう。日本の洋書専門店のサービスも充実する一方である。未来予測や地震予知などに頼れないことを思い知った人生の黄昏に、国内の地震発生をiPhoneで最初に知らせてくれたのがフランスの週刊誌からであったという時代に生きていることは何か誇らしく、冒頭の失望を忘れさせてくれることも屢々である。

一昨年学会報告で20年ぶりにナポリを訪れる機会があった。20年前、真偽はともかく徴兵拒否の代替義務だとのことで待ち合わせた現地の学生さんに(イタリアで屢々経験する理不尽にも閉まっている重要な展示室を含め)考古学博物館の案内を受けた後に治安の悪そうな界隈を散策し教会を巡って疲れ果てた頃、古書店の店先に目が止った。当時欧州で100万円してもおかしくない全集が100万リラで積んであった。同じく補助通貨がない円よりもさらにゼロが多くミリオーネという単語が日常会話でよく出てくるイタリア生活に慣れていたはずが一瞬頭で計算が混乱した。スターリングに始まり欧州が通貨危機に見舞われた年。100万リラは約7万円。法律古書専門店ならありえない値段。疑心暗鬼に店に入って商談成立。郵便事情ゆえナポリからの郵送など論外。中央駅までさえどう運んだものか。「買えば」と気楽に言った家内と二人でフォリオ版十数冊を持ち帰る英断。ほかにも法律書があるが金曜の夕方だから月曜に来いと言われ旅程変更。週末をアナカプリで過ごし再び店へ。イタリアでよく経験する、店先からは分からず気に入った人だけ入れてくれる奥まった怪し気な書庫に案内される。他分野の古書に紛れ法学関連の是非とも欲しいフォリオ版が二冊。一冊7万円。週末を挟んだのは相場を調べるためだったのだ。

当日南イタリアの混雑した列車には何やら大きな荷物を抱えた怪しげな東洋人カップル。戻って経緯を話すと「そんなのは買ったのじゃなく我が国から盗んだのですよ」と言われる。これがフィレンツェ、ジェノヴァ、アムステルダムで、パリの古書市で、ドイツの小さな町の律儀な古書店主から、人を介して法曹貴族の末裔から、乏しい資金での古書購入の始まり。店主からさんざん息子の愚痴を聞かされたり、先祖が利用してきた貴重な本を同国人に売るなど恥かしく日本人だから売って差し上げるのだと妙な恥観を説かれたり、嫌な横槍も経験した。件のナポリの古書店主は、忘れかけていた頃に、どう突き止めたのか日本の大学にまで電話をかけてきて入試業務ではかの先生方もおいでの室の受話器から「先生の欲しそうな本が手に入った。」と懐かしい大声を聞かせてくれた。今回の訪問前にお亡くなりになっており店は息子さんの代に。よく覚えていますよと言われ、いい加減なことをと思った矢先、懐かしいエピソードを語ってくれた。インターネットなき古き良き時代。